慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生活史の社会学：その方法と課題
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.52 (2001.) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000052-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を経て弔い上げによって完結する文化装置として理解する必要があり，この点については柳田民俗学の成果を今少し取り入れるべきであったかもしれない。第四に死後には肉体から遊離すると考えられている死霊と人間との新たな取り結びの過程があるが，これに強く関与する僧侶や寺院の役割の叙述が希薄なので，論述に必要な範囲で考察を加えるべきだったと思われる。第五に葬祭業者がエージェントであるという指摘は的確であるが，近年，葬祭業者に一連の生命操作の知識が大きな影響を与えつつあり，死や葬儀には生命倫理の問題を避けることが出来ない。例えば，「もやいの会」の「お髪塚」（DNA保存のための真空パック）や宇宙葬，或いはDNAメモリアル（遺体から採集されたDNAを解析して，サンプル片と共に位牌に収納し，遺伝子操作に備える）などは，将来の医療技術を見据えた商品開発である。今後は社会情勢の急激な変化に素早く反応する葬祭業者の動態に注目することが必要であろう。以上のように本論文には，なお解明すべきことが残されているが，これらの指摘は，文化人類学・民俗学・宗教学の領域において未踏の分野に挑んだ本論文が，更なる論議の誘発剤となることへの期待をこめてのものである。

上記の審査の結果により，筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士（平成13年2月27日）

乙　第3454号　有末　　賢

生活史の社会学—その方法と課題—

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学法学部教授・
大学院社会学研究科委員
社会学博士　川合　隆男

副査　慶應義塾大学経済学部教授・
大学院社会学研究科委員
経済学博士　中川　清

副査　東京教育大学名誉教授
文学博士　中野　卓

論文審査の要旨

『生活史の社会学—その方法と課題—』と題された本論文は，人間がそれぞれに生涯にわたって生きる多様な歩みや生き方に関する生活史という問題・研究領域をとりあげたものである。人間生活の個人生活史に主として焦点をあてて，現代社会学の理論的な課題と方法論的な課題，主題と方法，とを共に複合的に把握しながら，特に方法論的な課題に着目して自己と他者，生活者と研究者，被調査者と調査者とのかかわりを基軸に生活史としてのデータ，データ収集，データ分析の視点から生活史（ライフヒストリー）研究の可能性を開拓しようとする意欲的な論文である。論文構成は，全13章であり，序章，第1部現代社会学と生活史研究，第2部生活史の意味論，第3部生活史の応用と解釈，そして終章と大きく分けて3部構成となっている。

I.　本論文の構成内容（目次）

本論文の構成内容（目次）は以下の通りである。（各章内の節立ては省略）

序　章　「生活史」の社会学に向けて
第1部　現代社会学と生活史研究
　第1章　生活史研究の視角
　第2章　生活研究とライフヒストリー
　第3章　生活構造論とライフコース研究
　第4章　生活誌研究と奥井復太郎
第2部　生活史の意味論
　第5章　質的社会学としての生活史研究
　第6章　〈意味の社会学〉と生活史研究
　第7章　生活史における記憶と時間
　第8章　生活史調査の意味論
第3部　生活史の応用と解釈
　第9章　重層的都市文化への生活史的アプローチ
　第10章　移民研究と生活史研究—日系人・日系社会研究の方法論的課題—
　第11章　日系ペルー人のエスニシティ変容
　第12章　生活史と「生の記録」研究—ライフヒストリーの解釈をめぐって—
　第13章　彷徨するアイデンティティ—ライフ・ドキュメントとしての日記と作品—
終　章　再帰性とライフヒストリー—生活史研究とポストモダン—

II.　論文の概要

序章「「生活史」の社会学に向けて」においては，本論文の主題がなになのかを明らかにするうえでまず生活史の社会学的研究の意義と課題をとりあげ，先行研究の概括がなされる。1970年代以降現在までの第3期にあたる生活史研究の再興期の動きに焦点をあてて，同じ時期

に前後して現代社会の動向を反映して展開される現代社会学の現象学的社会学，シンボリック相互作用論，エスノメソドロジー等の人々のリアリティ，日常生活，主観性，主体の意味，意味解釈，相互作用を改めて問う新たな潮流，ジェンダー論，エスニシティ論，マイノリティ論等，ミクロ社会学への関心等にも基礎的に注意を向けて，生活史研究の重要性と意義を確認するものである。従来，支配する側を主とする歴史資料や記録，民俗資料のもとでは十分には残されない，語られない，刻み込まれることのなかった個々の人々の口述史やライフ・ドキュメント等に光をあてていく作業の重要性を指摘している。その意味であらためて特に集合的な意味での「生活文化」や「生活構造」よりもむしろ「個人生活史」に中心的な関心を向けて「社会学の研究方法論」，その質的研究法の問題をとりあげていくことが明らかにされる。

第1部現代社会学と生活史研究では，序章を継いで論者が次に生活史研究をどのように展開していくのかを論じている。現代社会学の動向に照らしながら，生活史研究についての論者の基本的視角と方法論が展開されている。第1章「生活史研究の視角」は，現代社会学の新たな動きとしての1960年代後半以後の「パラダイムの危機」，現実の「社会問題」の噴出，「批判的社会学」の台頭などに直面して社会学が問われていく近代を相対化する「歴史」の視点，個人の主観性を基礎にする「日常生活論」，「個人」の全体性等への関心という理論研究における批判と反省，更に参与観察法，生活史法等の質的調査法の軽視，調査者と被調査者の関係性の重要性などの社会調査論における批判と反省という現代社会学における批判と反省とに根差しつつ，生活史研究の基本的な視角を模索していく。①主題の軸（事実—意味付与），②方法の軸（データ収集—解釈）の二つの軸を立て，そこから(1)生活史事例の類型化，(2)質的調査法と「個人」研究，(3)主観的現実の変更過程，(4)生活史と社会史という生活史研究の四つの視角が設定されていくことになる。本論文ではこの主題と方法の両軸設定に照らしていえば，特に(2)質的調査法と「個人」研究，(3)主観的現実の変更過程を中心にして第2部，第3部が展開されていると理解できる。

以下「生活史を見直すということはとりもなおさず現在の自己のあり様を省みることであり，他者の生き方の中に自己の生き方を投影させながら新たな人間像を模索していくという生活史研究」（26頁）のパースペクティブに立脚して考察が進められていく。

第2章「生活研究とライフヒストリー」，第3章「生活構造論とライフコース研究」，第4章「生活誌研究と奥井復太郎」では，生活研究，生活学と生活史（ライフヒストリー）研究との間の研究範囲と研究方法の交錯，連続性や相違を明らかにしようとするものである。この関心領域をめぐってはこれまでに歴史学，民俗学，社会学，文化人類学，心理学等をはじめ広く社会科学，人文科学，精神医学等のさまざまな分野での諸研究と重複するだけに，特に1970年代以降の生活史研究の動向をうけてミクロな生活史，個人中心的なパーソナル・ライフヒストリー研究としての「生活史研究」の研究方法と研究範囲の特徴を，広く生活研究の中に位置づけておこうとする試みの諸章である。研究・調査方法上の特徴からみれば，ライフヒストリー研究では自伝，伝記，日記などの文献資料や生活記録等も重視されるが，聞き書きによる口述の生活史などの主観的な質的調査法，特定の個人生活史の具体性や主観的な意味の理解，調査者と被調査者の信頼関係や微妙な関係等が重視される。また，ライフヒストリー研究の主題および研究範囲に関しても，どのような歴史的背景にあるとしてもさまざまな主題からさまざまな個人の生涯・一生の歴史に主にかかわるし，人々の活動範域を反映して国境や地域，文化を超えて問題・研究関心を広げていかざるを得ない。従来の生活構造論，生活システム論，生活組織論，生活意識論，ライフコース研究，生活誌等の諸研究とも重複しつつも，独自の研究方法と領域をもつものとして生活史研究を位置づけようとする。

次いで第2部生活史の意味論では，質的研究法・調査法としての生活史研究に重点をおいて個人生活史における個々人の「生きた経験」と人間主体の「生きる意味の探究」，人間の「生の意味」(significance, meaning)の生成過程や形成・変容過程の問題を方法論的に検討している。第5章「質的社会学としての生活史研究」，第6章「〈意味の社会学〉と生活史研究」，第7章「生活史における記憶と時間」，第8章「生活史調査と意味論」がとりあげられている。

基本的には「関係性としての生活史調査」，「調査者—被調査者の関係性と意味の生成」という問題構成を軸に方法論的な課題が考察されていく。第5章「質的社会学としての生活史研究」は，生活史資料をめぐる意味解釈にかかわる質的データの分類と性格，「代表性」やデータ収集等の質的調査論，事例分析・歴史分析・テクスト分析・会話分析・深層分析等の質的分析論を論じている。ただし，この章の文脈と内容に照らせば，「質的社会学」という用法よりも質的（定性的）調査法という用法の方

が適切ではないかとも考える。第6章「〈意味の社会学〉と生活史研究」では，現代社会学における現象学的社会学，シンボリック・インタラクショニズム，エスノメソドロジーなどの「意味の社会学」，意味学派と生活史研究との関連性をとりあげて，「意味の社会学」から「生活史への着目」という変換によって生活史研究の社会学的可能性を模索しようという意図のもので書かれている。現代社会学における「意味の社会学」の理論的課題と質的調査としての生活史研究を相互に媒介しようとする試みであり注目される。

第7章「生活史における記憶と時間」は，人間の「生の意味」，意味の生成・形成・変容，記憶・記録の改変過程にかかわる重要な問題を扱っている。語りによる「記憶の生成」，現在による過去の「意味付け」，聞き手による「時間の共有」，語り手による記憶と時間の秩序，更に記憶と「語り得ぬもの」，アイデンティティの喪失と再生などの考察を通じて，論者は「反省的自己意識」の再構成という時間と意味の重要性を指摘し，ライフヒストリー研究における「人生の意味」の探究と発見という視角を明らかにしている。第8章「生活史調査の意味論」は，本論文の調査方法論上の課題から重要な問題をとりあげている章でもある。すなわち，生活史調査における個々人の「生きた経験」としての「事実の探究」と「生きる意味の探究」，調査者（インタヴュアー）と被調査者の関係性と「意味の生成」（あるいは共有）「意味の創出」，調査過程におけるバイアスとジレンマ（偏り，差別感，過同調，思い入れ，ディスコミュニケーション等），そして調査と理論の往復，などといった重要な問題である。しかし，調査方法論からすれば重要な問題であるだけに，それらについての更に掘り下げた考察と展開が必要であるとも考えられる。

最後の第3部「生活史の応用と解釈」は，第9章「重層的都市文化への生活史的アプローチ」，第10章「移民研究と生活史研究—日系人・日系社会研究の方法論的課題—」，第11章「日系ペルー人のエスニシティ変容」，第12章「生活史と「生の記録」研究—ライフストリーの解釈をめぐって—」，第13章「彷徨するアイデンティティ—ライフ・ドキュメントとしての日記と作品—」が収録されている。

論者がこれまでに直接に関係して研究してきた東京都中央区佃島での調査，出稼ぎ日系ペルー人に関する社会調査や生活史調査，稲垣尚友氏のライフ・ドキュメントとしての日記や作品，インタヴュー調査等の生活史研究の事例を通じて，多元的リアリティや主観的リアリティの再構成過程，エスニシティの変容過程，捜し求めるアイデンティティなどが論じられている。

第9章「重層的都市文化への生活史アプローチ」は，論者の既著『現代大都市の重層的構造—都市化社会における伝統と変容—』（1998年）のテーマと重なるものであり，権田保之助，今和次郎，奥井復太郎などの先行的な都市研究を踏まえて都市文化や都市民俗文化を担う都市生活者の生活史にみる多元的リアリティの重層性，意味の重層性，それらの変容を解明しようとするものである。第10章「移民研究と生活史研究—日系人・日系社会研究の方法論的課題—」，第12章「日系ペルー人のエスニシティ変容」の2章は，移民をめぐる同化—多元化，「国民国家」統合化—ボーダーレス化の軸のもとで多元化しボーダーレス化する現代社会の状況にあって「移民の生活史」研究の必要性，日系人移民の生活史に関する先行研究の再検討，その方法論的課題に言及して，そのうえで日系ペルー人の出稼ぎ移民を事例としてとりあげてボーダーレス化の類型化とある日系ペルー人女性（調査時71歳）のインタヴュー調査を通じてのエスニシティ変容過程の解明を試みている。日系人としての同化—統合化という単純な変容ではなく，出稼ぎのプロセス，地域移動や地域社会，家族・性・年令・ジェンダー等の社会的要因等による「在日」日系ペルー人というカテゴリーへのエスニシティ変容も多元的，戦略的，かつ可変的であること，こうした事例を通じての「多元的エスニシティ」化の動きを明らかにしている。

続いて第12章「生活史と「生の記録」研究—ライフヒストリーの解釈をめぐって—」，第13章「彷徨するアイデンティティ—ライフ・ドキュメントとしての日記と作品—」は，ライフヒストリー研究における口述の生活史などのライフストリー的主観性と日記や手記などのライフ・ドキュメント的主観性，両者の主観的リアリティ構成の相違，対比や連関の問題をとりあげている。具体的には稲垣尚友氏という人物の1960年代の青年期の大学中退，奄美の島々の旅から1990年代までの放浪し遍歴するひとりの手職人・竹大工，もの書き人のライフ・ドキュメントとしての公刊された日記と作品，論者のインタビュー調査を通じての主観的リアリティ構成の揺らぎとアイデンティティの彷徨を分析しているものである。「あてどない旅」，「失われたものとしての原初」，「拠点としての島」，「存在証明としての手」などのカテゴリーを用いながら過程分析としてアイデンティティの揺らぎやモデルなきアイデンティティを浮き彫りにしていく手法は興味深い。欲を云えば，個人生活史をめぐる社会史的

な文脈や論者自身のインタヴュー調査の契機や方法上の文脈にももう少し言及しておいてもよかったのではないかと考える。

終章の「再帰性とライフヒストリー—生活史とポストモダン」は，第1部の現代社会学の動向に照らしての個人生活史研究という問題設定，第2部の個人生活史における生の意味探究をめぐる方法論的考察，第3部の生活史の事例研究を経て，再び大きく現代社会のポストモダン的な状況のもとで自らの存在と言説，行為，そして生活史を「語る—聞く」という相互行為がどのような意味をもつのかを再考しようとするものである。

III. 評価と問題点

本論文について積極的に評価し得る点と問題点を指摘しておきたい。

(1) 生活史研究のこれまでの研究成果を積極的に活用しつつ，生活史研究の方法論的課題に焦点をあてて現代日本の個人生活史研究の可能性を大きく切り拓くものであり，今後の生活史研究のひとつの新たな礎石となるもの，と評価できる。生活研究の系譜は歴史的にも多様であり多くの成果もあるが，生活史（ライフヒストリー）研究，個人生活史研究そのものは日本においては本格的に開始されていくのは中野　卓『口述の生活史』(1977)，「個人の社会学的調査研究について」(『社会学評論』1981)（日本社会学会会長講演）を中心にやはり1970年代以降であり，中野　卓，石田　忠，桜井　厚，大山信義，島越皓之，前山　隆，水野節夫などの諸氏の研究，1981年設立以降の生活史研究会での成果，Bertaux, D., Denzin, N. K., Berger, P. L. & Luckman, T., Easthope, G., Plummer, K., Plath, D. W. などの外国の研究者による研究等の文献渉猟と研究成果の積極的活用を試みつつ，そのうえに個人生活史研究における方法論的課題に特に焦点をあてて調査者と被調査者との関係性，相互行為を軸にして，データの質，データ収集，データ分析等の問題，生活史研究におけるライフストリーとライフ・ドキュメントの関連等についての方法論的諸問題を解明している点でこれまでの生活史研究においてその独自性とともに新たな礎石を提するものとして評価される。

(2) 生活史研究における基本的視角のうちでも，質的調査法と「個人」研究，主観的現実（リアリティ）の変更過程，の特に後者の主観的リアリティの構成，生の意味構成や変容を本論文の基本的な主題として生活史の意味論を展開している。今日身近に繰り広げられるさまざまな事象，歴史の歩みの相対的な視座の必要と現代社会のあり様，ポストモダンな状況等に照らし合わせるときに，これまでの分断された学問領域を超えてさまざまに生きる個々人の生活史における意味論を問うことは極めて重要な課題といえる。具体的な事例として論者が自ら試みている出稼ぎ移民として日系ペルー人のエスニシティ変容，ある竹大工職人・もの書き人の遍歴を通じてみた彷徨するアイデンティティの事例考察も貴重なものである。

(3) 生活史研究領域を媒介項にして，現代社会学の理論的な動向や課題と社会調査論，調査方法論とを相互に連関させ，接合・媒介していこうとする論者の研究姿勢も評価されるべきであろう。わが国の社会学界の歩みのなかにも理論研究，学説研究（理論派（理論家））と調査論，調査の試み（調査派（調査屋））との間にあたかも対立し分断するかの如きに位置づけることもあったが，多様な研究姿勢のなかにも両者を相互に媒介する研究姿勢は評価されるべきであり，重要な課題ともいえる。本論で試みているような理論と調査の相互媒介的な往復運動は今後ますます必要になっていくとも考えられる。

他方で敢えて問題点をも指摘しておかざるを得ない。

(1) 本論文は論者がここ20年近くの間に研究したり執筆してきた大部分の諸論を今回博士論文として再構成したということもあって「論文集」としての性格も強く，しばしば重複する箇所もあり，少々煩雑な印象を受けないでもない。公刊の折りには一貫した推考や論文構成を心掛けるべきであろう。

(2) 調査方法論における質的調査の展開については，特に質的分析においては，事象（質的データ）の性質やその生成・変転過程，意味解釈が問題となるだけに，より注意深い吟味や観察，より周到なカテゴリー化や分析手続きが要求されるところであり，量的調査法との関連をも含めて方法論的考察をより一層深めていく必要があるのではなかろうか。意味論にかかわるだけに重要な課題ともいえる。更に調査をめぐる倫理的な問題についてももっと言及してもよいのではなかろうか。加えて，事例研究を更に深めること，そしてその継続的な展開，事例の類型化，生活史と社会史との関連など今後に残されている研究課題も多い。しかしながら，これらの問題点も本論文の価値を大きく損なうものではなく，今後に託された課題でもある。これからの研究の一層の発展を期待するがためである。

IV. 結　論

以上，本論文の内容の審査を通じて，われわれ審査員は，有末　賢君に博士（社会学）の学位を授与することが適当である，と判断する。